

1980・11・16



全人民は、

腐朽せる軍事亡國の道をふみしだき、  
三無ファシズム解体闘争をもつて、  
社会主義建国に向かう  
戦時の決断を下せ！

さしつまる転向・挫折文明の破局、それをいかに廃絶するか

マルクス主義青年同盟

## 目 次

一、起て、戦時の人間的理性と行動力の獲得をめざして！  
来たれ、社会主義建国統治を習得する正義の戦場へ！

二、開け、全人民を社会主義に向かわせるための情勢を！

集え、共産主義の理性を解放する党旗の下に！

# 一、起て、戦時の人間的理性と行動力の獲得をめざして！ 来たれ、社会主義建國統治を習得する 正義の戦場へ！

に緊要な政治的任務である。

七〇年代十年間の（その中でも特に後期数年間の）社会＝政治史（一部の人にとっては、良心だとか、熱意だとかは、ただ虚しい無意味なものとしてしかうつらなかつた一時期）こそ、この戦時の人間的理性と活動力を広く問ひ、いまだぼんやりと茫漠としている戦時の理性と行動力を、全社会的に熱意をこめて呼びおこしていく」とこそ、われわれの特

①

人間の「良心」だと「心」だと「信心」

だとを、いの一番に説く宗教界はどうか。

イランイスラム革命は、その膨大な驚嘆すべき民衆エネルギーによつて、世界を震撼せしめ、ポーランドの労働者は、イエス・キリストとローマ法王の名を錦の御旗に自主労組をつくり上げて、世界政治に重大な一石を投じた。これはとともにかくにも、旧世界の抑圧機構を解体する革命的行動の側に立つた「神」の演じた役割であった。

片や、常に支配権力の側に身を寄せ続けてきた「お東さん」（東本願寺）はまるも醜悪な内紛劇と、おのれ自身の権力抗争によって、世間のひんしゆくをかい、國家権力の手入れをうけている。

「人の和」を説く創価学会は、大派閥抗争に突入し、その不祥事の処理を一方の側が警察権力に依頼すれば、もう一方の側は、日共・宮本委員長宅盗聴事件を内部暴露し、池田会長の「国会喚問」を求めて、自民党に陳情するといった具合である。自民党宗教部会（この数年来、選挙で特にその力が注目されている宗教票を扱うところ）は、公明党との関係を横目ににらみながら、これにくちばしをつづこむか、不介入でいくかでもめている。公明党は、「政教分離の原則」のたてまえ上、「党として」は「表立ってはこれに介入できないため、政府権力と、自民党は、この問題に対する裁量権を手にいれることになつたのである。労働者諸君！

これはよいことである。なぜか、なぜなら、これは戦時の政治闘争にあたつて必ずつきまとつてきた、例の「神話」や「通説」——つまり、あらゆる中道的中間政党が危機の時代に支配権力の側につき、保守化、翼賛化するのでは、革新左翼政党（たいていは共産主義政党のことと言つてはいる）がこれを批判しきりて、政府の側に「おいやる」からであるといつた「神話」や「通説」から労働者や活動家を解放する作用を促進していくからだ。そしてついで、公明党的中道政党の下に、一時期、社会改造の願望を託していた市民諸君や、搾取や抑圧や疎外からの出路を、「信心」に求めざるをえなかつた人々をここから引き離していく作用を促進していくからである。

共産党は、七〇年のかの「出版・言論妨害事件」で学会・公明の「ファッショ的体質」を攻撃し、その中で公明党は「政教分離」を宣言した。七五年宮本・池田会談での「創共生協定」にさいしては、共産党は、これは反戦・反ファッショの共闘協定であると主張し、七〇年代後期には「公・共戦争」をやめさせて世上をにぎわした。こういった闘争によつて「革新」の側にいた公明党が、政府の側に「おいやられた」のではなく、逆にこれに対する反論や、つじつまあわせの革新ポーズをとることや、また、おのれの行為に対する政治的確信のなさからくる内部動揺をおしとどめるための仕事に多大な神経と労力を費やされてきたからこそ、彼らの指導部活動が

今日は、正真正銘の「有能」な仕掛け人的陰謀・謀略政党に「成長」し、「飛躍」することができなかつたのである。そしてこのためのケチな小細工や、その場しのぎ的玉虫色的「宣言」がもたらした内部腐敗と分裂が今彼らの手をしばつて、最高機密と、おのれのゆくてを、支配権力によって握られ、とりこまれているというのが、事の真相である。

#### 人民諸君！

自覚した共産主義者は、また戦略的にものを考える政党人は、事態をこのように分析し、考察するものであり、およそ「現情勢」を評価するさいには、それの現在の、こんにちの特殊性から評価するだけでなく、いつそう深い原動力、日本ならびに全世界におけるプロレタリアートとブルジョアジーの利害のいつも深い相互関係の見地からも評価していくものなのである。

そして同志諸君、銘記しておこう、われわれの戦時の人間的変革活動への熱意や決断は、またこの活動における鉄のエネルギー、不屈、果斷、献身といったものは、あれこれの観念の世界からではなく、ただこの現存するすべての（日本の、また国際的な）階級勢力の計算が完全にはつきりし、冷静になされる（記帳と

統制がなされる）ところからこそ——共産主義的前衛の現実の階級情勢に対する全面的暴露の闘いの中からこそ、（またそこからのみ）くみとつてくることができるということを！

## 2

労働者の同志諸君！労苦人民、青年諸君！急速に戦時色彩をおびてきた今日の政治情勢こそ、人間的変革活動の最も高度な形態たる国家統治の問題を、われわれ自身が学び、習得していくための不可避的な通過点である。われわれは無駄な時間を浪費せず、自分たちの力をいたずらに無力化する結果になるいかなるところにもとりあわずにこの情勢を有効に使っていくことにしよう。

國家統治の問題を習得するために、現情勢を利用するとは、ほかでもなく、現在の政府に反対し、戦時行動を強め、戦時体制に入っている現在の國家権力を握っている階級と闘い、これにうちかっていくための戦術を扱い全国民化していくことにほかならない。

人民諸君！

この点ではどんな幻想もいだかないようにならう。どんな回り道もせずに事態の核心に向かってまっすぐに進んでいこう。現在の国家と政府の階級的政治的性格については、どんなあやふやな、誤った、優柔不断な見解にも惑わされずにわれわれのなすべきことを確定していこう。

およそ現情勢にのぞむにあたって、ここ数年来のおのれの行為の諸結果に対して、ごまかしやうそいつわりのない厳密な評価を加え、「人間としてのけじめ」をつけることが責任ある人には必要であることは、かの長嶋も辞任にさいして言つてのことである。それを避けて、現状を、あれこれの権力者のせいにしたり、陰謀政治の責任に帰したりすればするほど、自らの人間としての誇りを失つていくだけであろう、と。そう、「諸君が、今回の件の背後に、親会社や球団やあれこれの関係者の思惑とか利害争い、地位争いにからむ

複雑な諸関係とかがあつたかをどんなに詮索しよう」と自由であるが、そしてそれの多くは事実であろうが、私は、ただこの六年間の結果に対して、監督としての責任をとり、男としてのけじめをつけるという意味で辞めたう、この不自由きわまりない文明を廃絶しうではないか。銀座のど真ん中で一億円を捨

と。そして、それがあつてこそ、過去の平和な時期の華やかな想い出に未練を残さず、「もう船は出ました、もはや後もどりはできないのです、これからが本当の闘いなのです」とはつきりと言つておられるのです」とは、王も引退表明のとき言つていたのである。

“われわれが共産主義者でない以上、これ以外のやり方で今日の権力政治に抗して、おのれの任務を果たし、民衆の支持と共感を得ていくことはできないのだ”と、七〇年代後期、少なくない人がおのれの任務、目的、初志を最後まで人間的活動としてやり続けることをあきらめた上で、それに対する願望と期待を、何か別のものに投影する形で過ごしてきたという、この一時期から、次の別の一時期へと移行するさいの「けじめ」のつけ方を“万人の挫折の代償”たる現代の英雄たちの言葉をかりて、歴史が被指導大衆に語りかけているかのようである。

いや諸君！ そうではない、政治の問題、國家統治の問題を、あるいはまた、あれこれの権力者とこれに抗する人々の関係の問題を、このような事例を借りてしか語りえないとい

つた運ちやんを、日夜目に見えぬ敵に脅かされる劇中人物として、得体のしれぬ緊張感に耐えかねてゐる道化として描き、それをだしにして、この一億円の出所を推測し、街の喫茶店や一杯飲み屋で、その詮索の競い合いでもてあました時間を使い、その「裏の裏」の核心に近づいていくといふ少々ゆがんだ隠微な習慣を別のものへとかえていこうではないか。

七〇年代後期の共産主義者と帝国主義者との闘争はこの方面で最も激しく闘われたのである。なぜなら帝国主義者にとって、民衆が、共産主義を、赤ちようぢんでの酒のサカナとして扱うことになるとこそ最も望ましく、共産主義の歴史につきまとうあれこれの「裏話」をコシップ記事風に扱ってくれることこそ最も好ましいことだからである。なんとなれば、共産主義以外に、おのれの國家統治の秘密や核心に、人間的理性と行動力とをもつて迫り、これを廃絶していくような大衆行動と自覺を民衆の中で呼び起こしていくことのできる人はいないからである。

このための帝国主義者の最も忠実な下僕で

あり、助力者が民社党であった。そのきわめつきは、かの「宮本スペイ・リンチ殺人事件」に関する国会での田舎芝居であつたが、その結果は、逆に、彼らが共産主義を特に恐れ、毛嫌いし、それをともかくにも抹殺するこ

とによつてしかおのれの地位を築くことのできない人々なのだと、いうことを人民大衆に教える結果にしかならなかつたのである。そして彼らは政治陰謀を好み、共産主義撃退の戦果をみやげにして大資本に売りこみ、自民党の派閥抗争に割つて入つて、政界再編の黒幕

という最高の功名を上げようとしたのである。その政治陰謀は、共産主義に向けられた時だけは熱をおびてくるが、こと政権に独自の力で迫るという点では自民党の一小派閥ほどの力もなかつたことが明るみにでたのである。なぜ彼らがこれほど共産主義を憎悪しているかといえば、彼らが共産主義に対してもうろくらく、うしろめたいからである。そして彼らがこれほど謀略を好みながらもなぜ政

権の座につけなかつたのかといえば、それはほかならぬ、共産主義に対する襲撃をもつて、できあいの支配権力、資本の権力にとりいることしか彼らにはできなかつたからである。

そこで、もはや従来のままではだめだ、も

はや春日一幸的政治ゴロ的論理では古くさい」と、佐々木委員長が安保・防衛問題で自民党との党首会談——政策協定をうつて、政権参

加への布石とせんとしたのである。彼の手本はドイツ社民党であり、ドイツ社民党が六〇年代初頭に、安保・防衛問題でキリスト教

主党と協定を結んで政権に参加していった姿をおい求めていたのである。しかしどドイツ社民とは何か、ドイツ社民とは、一九二〇年代に、ファシストと組んでドイツ共産党を血の海にしずめ、戦後は共産党を非合法化し、学生活動家をロボトミー手術にかけることによつて支配政党としての地位を確保しているところである。

だから民社党にとっての安保・防衛問題での政権党との政策協定とは、なにも緊迫せる国際情勢の中で国を思つてのことからではなく、戦時に共産主義の非合法化を要求する運動の一歩を踏み出したことを意味するのである。

こういつたことを、実はそれなりに知つていながら知らんふりをきめこみ、すつとぼけのを得意とすることによって、政治をこのことしか彼らにはできなかつたからである。うえなく不まじめなものにし、国家権力をめぐる政治情勢をきわめて不明朗な「けじめ」

のつかないものにしているのが社会党なのである。なぜなら彼らは共産主義のことを真剣に考えないことを申し合わせて成り立つてゐる党だからであり、ある時には共産主義とおのれとの差異を不斷にあいまいにすることをもつて革命ぶり、ある時には、政権共闘からなぜ共産主義を排除しなければならないのかの明確な理由を公けにできずに「共産主義と一線を画す」と声明したりするからであり、一言で言えば、国家権力への参加——不参加に対して、何のけじめも基準ももつていなければならぬ。七〇年代後期に社会党はまつたくふがいなくなり、社会党らしくなくなつたのではなくて、この社会党の歴史的性質と役割が最も集中して、最も鮮やかに一寸のアイマ

イさもなく露呈した時こそ、この数年間だつたのであり、その象徴が、政権構想をめぐる、野党共闘に対する彼らの態度だつたのである。なぜ彼らが共産主義のことと真剣に考えないのかといえは、答えは簡単であつて、真剣に考えてみると、おのれの存在理由がなくなるからである。そしてなぜ彼らが、七〇年代後期以前は、六〇年代にあつたあは、七〇年代後期には、革命的新左翼運動が崩壊し去り、かつての

ように日共と、日共にかわる前衛党をめざした革命的左翼との間で苦悩ぶつて、共産主義的前衛の不在によつて、共産主義に組織されずにいた広大な大衆の進歩性の代表ぶることができなくなつたからであり、七〇年代後期には、共産主義政党への飛躍に失敗し、それを正当化した反日共運動が完全に反共主義的腐臭を放つとともに、共産主義の見地に大衆を真剣に継続的に、たゆまず組織する前衛活動（マル青同的前衛活動）が彼らの「鼻先」でとくに強められていつたからである。

だから、社会党が今、「護憲で一大国民運動」と反政府・反自民の姿勢を強めているのは、改憲攻撃に対する真の危機意識や、七〇年代後期、政府自民党や反共中道の唱えた安保自衛隊問題での実質上の越憲準備に加担してきたことへの「反省」からなされているのではもちろんなくて、当面は連合政権なし、政権への参加条件なしと判断したからという理由以外のなにものでもないのである。つまり彼らは、権力問題に対する、国家権力に対する純然たるブルジョア自由主義政党なのであって、彼らが今日、英・米の二大政党制のようにして自民党と政権をわかち合う党へと転じることができなかつたのは（そしてそれ

は彼らとその支持者にとつて大変よいことはなかつたろうか）ひとえに、眞の共産主義政党を作り上げる革命家のまじめな労苦と、先進的大衆のそれへの心からの希求が、どのような条件下にあつても、どのような形態をとろうとも、戦後二十五年、一貫して絶えることができなかつたということにこそ、よつているのである。

したがつて、彼らにとつての「護憲」の旗とは、このきりのない沈滞や三無化を、共産主義とそれによつて呼びおこされる現政府を強襲する革命的大衆行動の力によつて、けりをつけでもらいたいという願望の旗を意味するのである。

### 3

人民諸君！

まさに現在の「政治反動」や「軍國主義化」や「改憲攻撃」等に反対し、鈴木「越憲」内閣（そう、すでに彼らは、戦後二十五年間の平和な時期の政治手法を投げ出し、これまで彼ら自身が越えようとなかつた限界を越え

て政治闘争をしかけてきているがゆえに、それはすでに反動化一般とか、改憲をめざしているとかいつものではなく、明確に「越憲」行為を行ない、数々の官吏や政治家や資本家の明白な越権行為を黙認する内閣なのである)と闘うということ、現在の国家統治に抗し、政府を解体するために闘うということは、同時に、この隠微な反共翼賛主義や権力問題に対する転向・挫折の文明を廃絶するために闘うことである。だからこそ、この闘争は全国民的なものとして波及させなければならないのである。

#### 労働者諸君!

論理的にも歴史的にも、この任務を担わずに、現在の鈴木内閣に反対し、反動化攻勢に反対する大衆行動を、本當によびおこし、盛り上げ前進させていくことができるだろうか?! できはしない。それは、明確な政治目標のない政治運動をやるようなものであり、必然的に拡散せざるをえない運動に力を注ぐようなものであろう。それは大衆闘争を結束させるのではなく、分散させるものであろう。政府・自民党は、この転向・挫折文明の上にそびえたち、この寄食的文明の票を直接かき集めて先のダブル選挙で大勝をおさめたか

らこそ、従来の一線を越えても平気なのだと判断し、そしてこの現代日本の国家統治の核心問題を問わない限り、反政府闘争は、それ自身に応じて、虚しく、遠いものにしか映らなくなり、ますます無力化、拡散化していくだけだろうと本能的に理解しているのである。

社共統一行動をなくせ、反共ファシストを隊列内部から一致してたたき出す結果になるような機会と場を与えるな、共産党(員)に組織者としての任務を自覚せしめ、反共主義に対する、権力問題に対する自己防衛においていった状態のままにせよ、と。これを促進するためならば、閣僚の改憲発言、越憲発言、なんでも結構、と。

ブルジョア諸君よ、どうぞ大いにやつてくれたまえ! 転向・挫折文明を廃絶する社会運動が波及していきさえすれば、その闘争方法をそれぞれの社会勢力が手にしあえすれば、いつでもあらゆる社会勢力が腐朽せる軍事亡國化の道を踏みしだく闘争に燃え上つていくのに必要な条件を、ブルジョア諸君が今、その種をまいてくれているのだ。

同志、友人諸君、今は、この攻撃を打ち碎いていく」とが焦眉の課題となっている。

この課題をやりぬくための旗は、共産主義運動の全歴史を統合する旗である。

共産党は、七〇年代後期に、あらゆる反共主義から自分を防衛してきた党である。

『共産党は自由と民主主義を破壊する』といふ攻撃に対しては、『自由と民主主義宣言』を起草してこたえた。『共産党は独裁をめざしている』という攻撃に対しても、『プロレタリアートの独裁』という訛語をあらゆる文書類から駆逐をすると約束した。『マルクス・レーニン主義は暴力革命を唱えている』といふ攻撃には、綱領の中の『マルクス・レーニン主義』という呼び名を『科学的社会主義』といふ呼び名に変更すると決定した。選挙の

強力な壁を破れなかつたといふものであつた。そしてその窮屈の根源をすべて国家独占資本主義体制に帰着させた。つまり彼らは、現在の国家統治に対して、きわめて自己防衛主義的に接近し、権力問題に対して徹頭徹尾の解放主義で接近していったのである。彼らはこの限界を越えることができなかつたので、反共主義を打ち碎くことができず、政権問題から遠ざかつていったのである。そこで彼らは今の状態から独自的に出発するしかない

いう結論に達したのである。

なぜ、今の共産党がこのように自己防衛的で、かたくななのかといえば、それは彼らが、共産主義運動の全歴史を統合し、この全結果に対しても責任をおうことを恐れでいるからである。共産主義運動といふもの、その全歴史というものに対して、実は彼ら自身が最も自己防衛になつてゐるからであり、それを組織者として公開し、おし広めて、普及させていくということにおいていちじるしく無能だからである。

七〇年代後期、帝国主義者は、共産主義を攻撃するにさいして、国際・国内共産主義運動の全歴史の不統合状態をつき、あげつらい、これを利用して人民勢力を擾乱せんとしてきたのであり、今の自民党ほど共産主義を真剣に研究している党はなく、これが最も高度で巧妙なやり方なのであり、これから比べるならば、民社や公明のやつていることなどは、本当の使い走り程度のことなのである。

ある時は、ソ連の脅威・侵略性で反共を唱えたかと思えば、ある時は中国も安保に賛成しているといつておのれの正当化の論拠にし、ある時は、戦後革命期以来の共産党の「内部抗争史」をいつたかと思えば、次には六〇年

以降の新左翼運動の四分五裂状態をあげつらつて共産主義には未来はないものと説き、またある時はスターリンの肅清をとつて共産主義恐怖論を唱えたかと思えば、その舌の根もかわかないうちに、中国での失脚幹部の復活をとつて共産主義活動無常論を説いてまわつたり、はたまた、マルクスやレーニンの偉大性、天才性を誰よりも高く評価して、それで現実にいる共産主義者をこきおろしたりするという芸当をこなしてきたのである。これは、脱イデオロギーで、無原則だからといってできることではなく、共産主義をあげつらつて帝国主義を延命させる以外には、おのれの統治を生きながらえさせる道は一つもないことを自覚した、首尾一貫した政治哲学と、論理明快な原則をもつていて始めてやれることにほかならない。

だからこれにうちかつためには、帝国主義の国家統治を理性の力で越え、社会主義建国統治を、戦時の理性と行動力とで習得する戦場へと赴く以外にはいかなる活路もないのです。つまり、「われわれは、六全協から今日までのわれわれの党組織と指導部がやつたことについては、われわれ自身の責任であるということには異存はなく、またこれに対する反共主義からの攻撃には、自己の正当性を防衛し、この面で独占資本に屈するということはないが、しかし、この自己史以外の共産主義の他の歴史を扱い、内外の共産主義運動の全歴史と諸結果に責任をもち、これを統合するのはわれわれの責任・役割ではなくて、他の組織、他の別の党中央委員会であるべきだと考える」と。

だからわれわれは、六全協から今日までのわれわれの党組織と指導部がやつたことについては、われわれ自身の責任であるということには異存はなく、またこれに対する反共主義からの攻撃には、自己の正当性を防衛し、この面で独占資本に屈するということはないが、しかし、この自己史以外の共産主義の他の歴史を扱い、内外の共産主義運動の全歴史と諸結果に責任をもち、これを統合するのはわれわれの責任・役割ではなくて、他の組織、他の別の党中央委員会であるべきだと考える」と。

まさに今日の共産党の「独自的行動」とは、彼らが自らの歴史上最も“身軽”になつて、共産主義の歴史の重圧から、自由になつて、反政府行動、反・反共翼賛行動に入つてきていることを示しているのだということ、したがつて、権力問題に対する自己防衛主義から、反共転向・挫折文明に対する自己防衛主義から、彼ら自身が解放されていくことを可能にする諸関係に、足を踏みいれ始めたことを示しているのである。

### 人民諸君！

こうして、旧来の政治関係を廢止するための船は出帆し、もはや「あともどりできない」情勢へとわれわれは歩を進めてきたのである。社会主義建国統治を修得するために、現情勢を利用するとは、現在の政府に対する闘争の戦術を確定することであり、それこそは、共産主義に対する、権力問題に対する、転向・挫折の文明を廃絶することなのであり、そのためには、共産主義運動の全歴史を社会化し、これをおしひろめ、この理性の力によつて、全國民に社会主義に向かうすべての入口を開くことである。

## 二、開け、全人民を社会主義に向かわせる ための情勢を！ 集え、<sup>つど</sup>共産主義の理性を解放する 党旗の下に！

労働者の同志諸君！労苦人民、青年諸君！  
このように見てくるならば、現代のあらゆる  
社会=政治生活の中に、共産主義が「出没」  
しているのである。共産主義の「妖怪」がい  
たるところにあらわれているのである。

否、われわれは、いたるところにこれを出  
没させ、あらわれさせて、旧世界の諸勢力が、  
現情勢の中でつづみ隠している真実や、あれ  
これの流行文句でおし隠している彼らの本当  
の目的をあばきだし、情勢の中で、多くの人

にとつては、ぼんやりとした、茫漠としたも  
のにしか見えないような（しかし確実に新た  
な事態と危機が進行していることだけは、ど  
んなにぼけた頭にも、ようやく理解されだし  
てきたような中での）諸関係の本当の相互関  
係を明るみにだして、いまだ茫漠としている

青年諸君、  
この点における、ありとあらゆる形をとつ  
た戦時の良心、戦時の熱情、戦時の勇気や決断、  
戦時の行動力をゆりおこし、はつきりとした、  
明確な形をもつたものへと高めあげていくで  
を、恐れずに戻いとろう。

そのためには、あらゆるところに共産主義  
を「出没」させる能力が必要なのであり、あ  
らゆる社会勢力の共産主義に対する本当の態  
度を、すべての人々に向かつて、理性の力で  
示しあげる能力が必要なのである。

9

平時の「理性」をもつた友人諸君、

共産主義の見地から、おのれの行為と思想が評価されることに対する自己防衛と拒絶の文明と手を切ろう。

「第三期」の活動家諸君、  
共産主義運動の歴史的断絶を廃絶することから  
の転向・挫折を葬り去ろう。

なぜ、どこから、共産主義の全歴史からあらゆる事物を評価することに対する自己防衛や、挫折がおこつてくるのだろうか。

それは、一言でいえば、やはり、歴史を切り開いている人々、自分よりも先を歩いている人々に対する態度が根本的にまちがつてゐるからである。彼らのあとに従おう、彼らに追いつこう、彼らと結びつこうとはせずに、彼らから分離しよう、彼らとは別の道、別やり方でいこうとして、根本問題と根本目的を、つまり帝国主義と共産主義の利害のいつそう深い相互関係を、共産主義を徹底しておし広めるという根本利益と目的とを忘れ去り、自分の願望や心情をこれに優先させるからである。

これが、転向・挫折型『社会主義』への多様な道』『多様な型の社会主義』論であった。

人民諸君、

だが銘記しておこう。今問題となつてゐるのは、この転向・挫折文明を、残すか残さないか、手を切れるか切れないか、という」とではなくて、誰が、どの階級が、どのようにして、どのようなやり方、手段、道を通つて、このいわば全國民的全民族的ともいえる転向・挫折の文明を廃絶していくのかということなのである。

今日、共産主義がその生活の中に最も強く影をおとし、最もひんぱんに共産主義の現状と未来からおのれの行動を計算し、規定しているのは、帝国主義者、国家独占資本主義階級、政府—自民党といった人々である。

彼らは、共産主義の力を数の力でおしあかることのころかしさをよく知つており、その真の組織力を現在の直接的影響力で評価することの無益さをよく知つてゐる。共産主義の真の「威力」が誰にもはつきりする形であらわれ、共産主義がありとあらゆる被指導大衆をとらえ、彼らの生活力を數の上においても獲得していくのは、平和な時代ではなく、戦争の時代、旧い、くされた国家統治そのものが解体的危機におちいり、あらゆる社会勢力の行動力が特に強まり、國家権力の問題をめ

ぐつて全階級の大衆までもが意識的行動を起こしていくようなそのような時期であること、彼らは、他のどの階級よりもよく理解しているのである。なぜか、なぜなら、彼らは国家を扱い、國家権力を動かしている統治階級だからである。

太平洋戦争末期、『国体護持のため、共産革命を回避するため』連合国への降伏を提議した近衛文麿の上奏文が出された時、いったい日本には、何人の共産主義者がいたであろうか、そしてしかも、彼らの判断は正しかつたのである。戦後革命期、共産革命への弾圧を強く、まさに「自主的に」主張し、譲らなかつたのは、アメリカの将校ではなく、奥野君、君たちの方ではなかつたかね。数十万の国会包囲デモのまつただ中で、官邸で死を決意したとまでいわれている岸総理は、この時ただアメリカへの下僕根性だけで、その決断をしたといえるかどうか。多くの人が「ただの」学生運動の大規模化とみるのがせい一杯であつたあの六〇年代後半の日々、多くの俗論とは別に、これへの対策を真剣に、夜を徹して研究したことなどが、つい昨日のことのように思い出されではこないかね、洋平君、財界トップの諸君。

まさに、このように、またこのようにしか考え、行動することができないゆえに、彼らは今、次の時代の共産主義との新たな戦役へとおりださんとしているのである。彼らは今、全世界的規模で、共産主義との新たな闘争方法の確立のために、手から血と汚物をしたたりおとしながら、死にものぐいで働き、闘っているのである。

彼らは、アメリカの大統領選挙にも首をつごみ（もちろん相應の資金も出して）、ある電機会社の経営者は、得意の自家用飛行機を駆つて現地にのりこみ、レーガン陣営のスパークスマニの役割を賣つて出た。曰く、民主党は、ケネディ以来、「機会の均等」と「結果の平等」を民衆がはきちがえるようなことばかりをやつて、これがアメリカ社会を弱めた最大の原因である」と。

『安上りの政府を！ 強いアメリカを！』——しかし、国家財政の大膨張を、国庫の大赤字をどうするのか、と。それは必ず、國家統治そのものの解体的危機を招くにちがいはない、その時こそ、共産主義が好機到来とばかりに国家転覆を企てるにちがいない、と。まさに今や彼らは、前方にひかえた（もちろん一挙にくるわけではない）国家解体の危

機——『共産革命』との決戦に備えて、国民が、おのれの生活の安定のために国庫から金を「引き出す」ことと正面から闘い始めたのである。これは寄食だ、持ち出しだ、と。かつては、共産主義的人間的変革活動からの転向・挫折の傷をいやし、この文明に金をばらまき、そのために国家財政支出を増やし、つかのまの城内平和を維持してきたのであるが、今や、逆にその支出が負担になり、厭うべき出血となり、国民の「無神経」と「あつかましさ」に腹が立つて、この文明、この諸関係の「廃絶」を欲つしだしたのである。老人医療？ 教科書無料配布？ ローカル線赤字の国家負担？ ——バカも休み休みいえ、この寄食者め、それどころか、電々公社の利益金の国家納入を！ 政府所有の日航株の売却を！ これこそおしゃべりをやつて、それがアメリカ社会を弱めた最大の原因である」と。

『安上りの政府を！ 強いアメリカを！』

——しかし、国家財政の大膨張を、国庫の大赤字をどうするのか、と。それは必ず、国家統治そのものの解体的危機を招くにちがいはない、その時こそ、共産主義が好機到来とばかりに国家転覆を企てるにちがいない、と。まさに今や彼らは、前方にひかえた（もちろん一挙にくるわけではない）国家解体の危

機——『共産革命』との決戦に備えて、国民が、おのれの生活の安定のために国庫から金を「引き出す」ことと正面から闘い始めたのである。これは寄食だ、持ち出しだ、と。かつては、共産主義的人間的変革活動からの転向・挫折の傷をいやし、この文明に金をばらまき、そのために国家財政支出を増やし、つかのまの城内平和を維持してきたのであるが、今や、逆にその支出が負担になり、厭うべき出血となり、国民の「無神経」と「あつかましさ」に腹が立つて、この文明、この諸関係の「廃絶」を欲つしだしたのである。老人医療？ 教科書無料配布？ ローカル線赤字の国家負担？ ——バカも休み休みいえ、この寄食者め、それどころか、電々公社の利益金の国家納入を！ 政府所有の日航株の売却を！ これこそおしゃべりをやつて、それがアメリカ社会を弱めた最大の原因である」と。

共産主義者が、また、それに指導された社会主義先鋒隊が、いたるところに出向いていきだよ、戦時は、と！

「諸君、今こそ、反共・転向・挫折文明そのものを廃絶する闘いの時である。共産主義のかだつて？！——そんなことは聞かんでもわかるではないか、警察では安心できんからだよ、戦時は、と！」

こうして彼らは、反共・転向・挫折文明に再転向を迫つてくるのである。

「これまで君たちには、共産主義をとらえないと、イランのSAVAKのごとく、人民の憎悪の下に焼滅せしめられていく運命をたど

ることである。

諸君は改造されなければならない。歴史を切り開く人間的変革活動をすぐにあきらめるその軟弱思想を廃棄しなければならない。あらゆる寄食生活と手を切った、生産活動の集団性の中へ、あらゆる私的怨念的活動と絶縁した公的活動の舞台へ引き入れられねばならない。しかし、戦争と革命の時代の唯一の公的権力たるプロレタリア的統治活動のために、共産主義的指導部活動のために、革命生産階級のために、真剣に、誠実に生きかつ闘う熱き闘いの季節へ！ 強制労働改造隊に志願せよ！ 社会主義救国労働奉仕隊に、社会主義全国遊動隊に、結集せよ！』と。

人民諸君！

こうして、帝国主義権力の文字通り、正真正銘のスペイ、飼い犬、ゴロツキ以外の、人間的理性と感性と生活力、行動力をもちあわせた、すべての基本的人民勢力が、多種多様な形態を通りながら、社会主義に向かう、闘いのありとあらゆる入口へとついていくのである。

まさに、今日の腐朽せる軍事化の政治体制の始まりの時期の、共産主義者と帝国主義者との闘争の関係はこのようになつてている

のである。この転向・挫折文明を帝国主義のくびきから解放し、共産主義前衛活動の下に「転向」させ、獲得していくこと、これこそ、今日におけるプロレタリアートの最も重要な革命的戦術である。そしてこの任務を基本的に達成した時、その時、われわれは、日本のすべての人民大衆が、共産主義に近づき、どちらえ、結びつくまでの政治的障害を日本の社会構造そのものの中から駆逐したことになるであろう。われわれは今、そのための必ず通らなければいけない中間駅を経由しようとしているのである。

現在の国家統治者たる帝国主義ブルジョア階級は、共産主義党と革命的プロレタリアートを除いた他のすべての社会階級の中で、最も

よく共産主義を理解し、共産主義をその未来の見地から考察することができる唯一の階級として、おのれの国家統治を守るために戦時行動によつて、他の人民大衆が、これに反対し、このブルジョア統治活動をなんらかの形で扱うことを介しながら、窮屈において、共

えることはできるが、（また、その危機を訴えることはできるが）権力問題に対する転向・挫折で支えられた『今日』を根本から変え、明日をおのれの目的にしたがつて切り開き、創造することはできない。なぜならそれは、おのれ自身の統治を解体し廃絶することを考えることを意味するからだ。

つまり彼らは、共産主義のことを誰よりもよく理解し、その直接的影響力の広まるようないかなる条件も、スキも与えまいという点では、前代未聞の統治を完成させはしたが、ただ一つ、根本上の問題を、すなわち、共産主義の理性の力、革命的理論の力を理解することがどうしてもできなかつたのである。

だから彼らは、あらゆる事態に備えて、すばらしい統治機構を作り上げたが、社会主義の協奏・競合運動をおしつぶすことはできず、そして、その統治は、そもそも始めから、共産主義と革命的プロレタリアートによつて、その理性の世界の中で乗り越えられ、敗北させられ、解体され、死滅させられているのである！

しかし、七〇年代後期の共産主義からの転向・挫折とは、この革命的理論——うちたてられた共産主義の思想方法—工作方法を手にする闘いからの転向・挫折にほかならなかつ

るをえないような道、経路、手段を、切り開いてくれているのである。

彼らは、未来を考え、『明日』の危機に備

たのである。

あらゆる帝国主義的生活を、理性の力で越えることが必要である。

同志・友人諸君、

これが共産主義の理性、共産主義の思想方法—工作方法といわれるものであり、これによつてすべての諸運動が統合されていくからこそ、そしてこの力があるからこそ、われわれは、共産主義を現代のあらゆる社会＝政治生活の中に「出没」させていくことができるのである。

き、三無ファシズム解体闘争をもつて、社会主義建国に向かう戦時の決断を下せ！

一九八〇年十一月十六日

全生活をマル青同的社會運動に！

全理性をマル青同的前衛活動に！

マル青同的思想方法—工作方法の下に、社會主義に向かう闘争の入口へとつけ！

起て、戦時の人間的理性と行動力の獲得をめざして！

來たれ、社會主義建國統治を習得する正義の戦場へ！

開け、全人民を社會主義に向かわせるための情勢を！

集え、共産主義の理性を解放する党旗の下に！

全人民は腐朽せる軍事亡国の道をふみしだ

発行日 一九八〇年十一月十六日

編集・発行 マルクス主義青年同盟

発行所 党旗社

東京都墨田区亀沢三丁二七一三

マル青同 中央本部

電話番号 ○三(六)四二四八一

郵便番号 一二三〇

振替 東京 一九〇七八四  
カンパ送り先

第一勧業銀行亀戸支店

(普) 一六五二七三九

永井 弘

〔関西地区事務所〕

電話番号 ○六(三四九)二三五四